第１８回 福岡県美しいまちづくり賞　受賞作品

<>

- 大　賞 ： 伊田竪抗櫓、二本煙突
- 優秀賞 ： 津屋崎千件通り藍の家一帯

<>

【 住宅の部 】

- 大　賞 ： 昭和初期和風住宅の移築プロジェクト
- 優秀賞 ： 田原の住宅

【一般建築の部】

- 大　賞 ： 西南学院中学校･高等学校
- 優秀賞 ： 清星幼稚園北園舎

<>

- 泉川はまぼうの会

<>

- 山村文化交流の郷「いぶき館」

第 18 回福岡県美しいまちづくり賞総評

今年度は選考基準を大幅に改訂し、新たに「景観賞」を設けた。各地で展開されている景観形成の諸事業をより多く発掘するとともに、顕彰することによりそれらの活動を促進することが狙いである。表彰の対象範囲も大幅に広げるとともに明確にし、応募しやすい要綱とした。従来は、文化財

に準ずるまちなみ景観に限定するかのような誤解があって応募作品も限られていた。新規程では、ありふれた景観のように見えても、地域の歴史、文化、生活および産業が色濃く反映している景観については、積極的に顕彰する方向が確認された。崩壊しつつある身の回りの景観を維持継承することに少しでも寄与することができればとの思いからである。予想通りというべきか、今年の応募点数は飛躍的に伸び、選考に窮するほどであった。また、ハード面の評価にとどまらず、その維持および発展活動を含むソフト面を含めて評価しなければならないが、その両者のバランスをいかにとるかを巡って選考は困難を極めた。うれしい悲鳴でもある。かくして、今年度は計7点の表彰作品を選考した。いずれ劣らぬ秀作であり、今後の美しいまちづくりの起爆剤になってくれれば、選考にあたったものとして望外の喜びである。

美しいまちづくり景観賞

大　賞

伊田竪抗櫓、二本煙突

建築主　：田川市長
所在地　：田川市大字井田

景観概要	講　評
田川市で炭鉱の灯が消えてから４０年が経つ。その当時の面影を残すのが三井田川鉱業所の伊田竪坑櫓と二本煙突である。伊田竪坑櫓は、明治４２年完成。深さ３１４メートル、高さ２３メートル。二本煙突は、明治４１年完成。高さ４５．４５メートル、最上部の直径は３．１５メートル、最下部は５．４５メートル。二本で２１万３千枚の耐火用赤レンガを使用している。 現在、三井田川鉱業所伊田坑跡は石炭記念公園として生まれ変わり、市民の交流の場となっている。伊田竪坑櫓と二本煙突は、文化創造都市を目指す田川市のシンボルである。	炭坑の灯が消えて久しく、人の記憶からも遠のきつつある。しかし、ことの是非はともかく、石炭産業が我が国の近代化の原動力として寄与したという事実は消えない。今は石炭記念公園に生まれ変わった旧炭坑跡地に今も残る竪坑櫓と二本煙突がそれを主張しているかのようである。この二つの構築物は、貴重な産業遺産としての価値を有することはもとより、今は過去と現在をつなぐ市民の交流の場となり、この地の再生のシンボルとしての役割を負っている。遠賀川とその向こうに聳える緑の山並みを背景にして毅然として立つ赤茶けた竪坑櫓と二本煙突の姿は感動的である。

優 秀 賞

津屋崎千軒通り藍の家一帯

建築主：特定非営利活動法人
　　つやざき千軒いきいき夢の会
所在地：福津市津屋崎

地区概要	講　評
明治期大変栄え、その賑わいから「津屋崎千軒」と称された地域に、現在明治３４年に建築された旧藍染の店舗を保存した「藍の家」があります。白壁づくりの２階建て、室内の梁は大きな一本造り、土間（赤土）があり、桜材を使用した屋敷です。 また、隣接して、造り酒屋や通りをはさみ、薬局やウニの専門店など古い建物が残り、周辺のたたずまいは来訪者を心豊かな気持ちにさせる景観を形成しています。	昔の風情をとどめる建物は、ほぼ通りの中央付近で枡形をなす曲がり角付近に立つ数件に過ぎないものの、千軒通りの名残りは、今も一本の長い通りの両側にびっしりと建つ民家の多さから伝わってくるし、迫力も感じられる。近年、当地津屋崎がかつて塩の積出港として栄え、それにより多くの商家が林立し、これが通りの由来となったことをはじめ、まちの歴史に対する住民の関心も高まり、まちづくり運動へと発展しつつある。民家の改築等の際に昔の外観への復元を試みる事例が出現するなど実績も上がっており、今後、より多くの住民の関心と協力が喚起され、運動が発展することが期待される。

美しいまちづくり建築賞

大　賞

住宅の部

昭和初期和風住宅の移築プロジェクト

建築主　：齋藤　仲道
設計者　：近畿大学産業理工学部
建築･デザイン学科教授
工藤　卓
AL　architects
施工者　：大庭建設(株)
所在地　：太宰府市宰府
竣工年月：平成 17 年 2 月

設計趣旨	講　評
九州国立博物館の建設に伴う歩行者散策路整備のために、太宰府市の住宅文化景観として今後も大切にしていきたい昭和4年築の木造2階建和風住宅を移築再生しました。移築工事は、伝統的な木構造の耐震補強を施すとともに、大正･昭和前期の都市型住宅の特徴を持つ和風と洋風が折衷された意匠を修復しています。また、元の形の修復だけでなく、現代の生活空間づくりのために、床段差や浴室をバリアフリーに改造し、高齢化に備えたエレベータの新設、最新の省エネタイプの放射冷暖房設備、適切な	この作品は、九州国立博物館の建設に伴う歩行者散策路整備のため解体を余儀なくされながらも、困難な諸条件を克服して近接地に移築され、再びまちなみ景観の形成に寄与したことにおいて高く評価される。しかし、それ以上に注目すべきは、外観と表向きの室は復元的に扱う一方、裏側の日常の生活空間には現代住宅としての機能性と快適性を備えるべく様々な工夫がほどこされ、古い部分と新しい部分が絶妙なバランスで融合されている点であり、移築再生建築の面目躍如たるものがある。また、玄関とリビン

照明設備や天窓による自然光の導入、台所の電化設備など、新しい機能性と快適性を備えた住宅に装いを改めています。	グを隔てる白い縦格子は、放射冷暖房設備でありながら両室を柔らかく仕切る見事な空間要素として活用されるなど、隅々にきめ細かなデザインが駆使されていて、見応えのある作品に仕上がっている。

優秀賞

住宅の部

田原の住宅

建築主　　：山田利治
設計者　　：矢作昌生建築設計事務所
施工者　　：(株)緒方組
所在地　　：北九州市小倉南区田原
竣工年月日：平成 16 年 3 月

設計趣旨	講　評
周辺は車が一台通れるくらいの道路巾で、田畑が宅地開発された住宅地。 要望は、趣味のピアノとジャズフルートが思う存分演奏できる防音室、プライバシーを確保したデッキテラス、ワンフロアーの生活空間、家庭菜園の庭と屋根付き駐車場3台以上であった。 与条件から、2階に鉄骨で造った生活空間を設け、そ	狭隘な道路幅員を補完すべく敷地の一部を公共用地に提供するとともに、角地の見通しや密集住宅地の中における有効なオープンスペースを確保するために、1階には最小限の室を配置するにとどめ、大半の住空間を2階に集約するなど、敷地の特性と公共性を意識した説得力のある作品となっている。デッキテラスの回りに諸室を配置したコンパクトな2階の平

れをＲＣ造の防音室の上に「やじろべい」のようにのせた構成とした。この構成は、クライアントの要望を単純な手法で解決するのと同時に、狭い周辺道路の離合性の向上、基礎が建築面積の１／３になることでのコストメリットなど、様々な条件をも解決している。	面は室内外にわたる開放的な生活を可能にしている。また、１階の室を最小限にすることにより生じたやじろべえ型の外観も殺風景な住宅地の中の程良いランドマークともなっている。

大　賞

一般建築の部

西南学院中学校･高等学校

建築主　：学校法人　西南学院
設計者　：日建･鹿島設計共同企業体
施工者　：鹿島･清水･竹中･九州建設共同企業体
所在地　：福岡市早良区百道浜
竣工年月：平成 15 年 1 月

設計趣旨	講　評
学院の歴史を積み重ねた旧校舎講堂のイメージを継承して、新校舎の外装は英国産の煉瓦積みを採用した。チャペルのあるエントランスから教室棟を経	この新校舎は、80 数年の歴史を重ね重厚な風格を誇った旧校舎のイメージを踏襲する一方、都市景観地区に指定された百道浜のまちなみ景観を損なうこ

て体育館まで直線状の校舎は、動線上に連続する吹き抜けを用いて見通しのよい一体感のある校舎とした。教室棟の1階中央にある開放型の図書館がこの学校の特色である。4層吹き抜けのアトリウムとすることにより各階の教室とつながりが出来、トップライトからの自然光が図書館や教室まで達し、明るい校舎空間を実現している。またアトリウムでは採光･換気を工夫した環境配慮設計を行い、竣工後もデータ計測を継続してエネルギー消費量の改善を図っている。	とのないよう用意周到に外壁材料と色が選定され、きめ細かにデザインされた。その安定感のある外観は旧校舎に負けず、長らく市民に親しまれ、愛されることが予感される。内部にあっては、4層吹き抜けのダイナミックなアトリウムを中心に各ブロックが配置され、明快でわかりやすい空間構成が得られている。図書室と自習室が配置されたアトリウム1階のオープンスペースには、在学生間の交流を軸とする新しい教育の在り方が示されていて興味深い。室内環境面における配慮も行き届いており、全体として完成度の高い作品である。

優秀賞

一般建築の部

清星幼稚園北園舎

建築主　：学校法人　清原学園
設計者　：atelier　cube
施工者　：(株)斎藤工務店
所在地　：福岡市南区三宅
竣工年月：平成 16 年 10 月

地区概要	講　評
空地(くうち)＝道からのデザイン	内部空間と外部空間の境界、室空間と通路空間の

かつては田園地帯で、敷地西側の里道、曲がりくねった路地に面影を残す。幼稚園には空地(くうち)の面積規定がある。空地を道とし、建物を外部空間的に計画した。境界建物間を里道的小道で、内側を内部通路で、その内側を外部通路でデザインした。道には、大きさ、形の異なる溜りの空間があり、変化にとんだ空間を体感することができる。建具で仕切られ、絡み合った空間は内外をあいまいにし、ゆるやかに繋げると共に、路地をも思わせる。建具開放時には林間学校のような気持ちのいい空間が現れ、多様化する保育形態にも対応する。かつてのゆっくりとした時間が流れるおおらかな幼稚園となった。	境界、共に曖昧であり、しかもこれらが複雑に絡み合っていて、あたかも密集市街地における路地空間のように親しみを感じる。作者によれば、幼稚園の設置基準にある「空地」を「道」とみなし、かつて田園地帯であった敷地周辺における細く曲がりくねった里道が住宅の立地により迷路化した形態をデザインの根拠にしたとのことである。その是非はともかくも、出現した空間構造はおおらかで、しかも不思議な魅力に満ち、室の境界を越えてあふれ出る子供達の行動や遊びの特性に応えている。力作である。

美しいまちづくり貢献賞

泉川　はまぼうの会

所在地：糸島郡志摩町泉川地区

活動内容	講　評
平成９年９月に、私たちは九州最大のハマボウ群落のある糸島のシンボル泉川を泉川自然博物園「はまぼう夢のさと」と呼び、一帯の素晴らしい自然を守り息吹を与え、よりよいものとして次の世代に引	九州最大のハマボウ群落のある糸島郡志摩町泉川地区を自然博物館「はまぼう夢のさと」として育むことを目的とするこの団体の活動は実に多彩でかつ重層的である。この会がハマボウの花の美しさに魅

き継ぐとともに人と自然の交流をとおして、ここに新しい「伊都国文化・はまぼうの夢」を創造していくことを宣言します。と設立総会で宣言文を採択して、泉川はまぼうの会が結成されました。

活動はまず、空や雲などそこにあるもの全てを展示品として、泉川自然博物園「はまぼう夢のさと」を開園させるために、開園記念碑、駐車場、橋、案内標柱、看板、名札など全て自前で設置し、平成 10 年 7 月に開園しました。

泉川両岸の雑草の草刈、漂着ゴミ、散乱ゴミの回収などの清掃活動は、年間を通してほぼ毎日行っています。

また地域の小・中学校の総合学習の支援や、現地での体験学習などを指導し、地元農業高校とは連携し清掃活動やイベントを開催しています。

その他社会教育団体やボランティア団体、地域づくりや環環保護団体との連携や交流を深めています。　活動によって、泉川が自然博物園として甦り、無名のハマボウが広く知られ、多くの人たちに自然の素晴らしさと大切さ、やすらぎと潤いをもたらしています。

ハマボウの自生地が年々拡大し、まさに泉川は川の原風景そのものであり糸島のなか でもシンボルとなっています。

せられて始められたことは疑いないものの、それを起点にして自然環境保護の全体に目が向けられ、人と自然との交流を通したまちづくりへと発展したこと、その功績において高く評価される。その広がりは地域の学校、行政、社会教育団体や環境保護団体、また種子の配布活動を通して全国各地へ、さらに国内の諸大学や外国の大学へと及ぶ。ハマボウの押し花や草木染めをはじめ多様な文化活動も生まれるなど、まさに夢と希望に満ちた楽しい活動が展開されている。

(財)福岡県建築住宅センター理事長賞

山村文化交流の郷

「いぶき館」

建築主	：東峰村長
設計者	：(株)宮本忠長 建築設計事務所
施工者	：(株)松村組九州支店
所在地	：朝倉郡東峰村大字福井
竣工年月	：平成 17 年 2 月

設計趣旨	講　評
山村文化交流の郷「いぶき館」として復原された建物は、筑豊の石炭王伊藤伝右衛門が邸宅の一部を宝珠山村に移築して「炭坑クラブ」として利用されていたものです。その後旅館「ほうしゅ山荘」、「いぶき館」と三度の解体・移築を経た歴史ある建物です。復原された交流棟に新たに展示棟を併設し、村の豊かな歴史や文化を次世代を担う人々に伝える拠点とします。これらの建物を雁木で繋ぎ、新旧の融合を図ると共に創出された中庭は来館者の交流の場として有効に活用されます。建物周辺環境も山村風景に溶け込むことを意図し、既存の竹林や植栽をできるだけ残し、村民の記憶（心象風景）を大切にした再生を目指しました。	交流棟における移築復元の技術の高さはもとより、新たに新築された展示棟との間における絶妙な空間バランスとスケールこそが本作品の最も評価されるべき点であり、落ち着きの中にも軽快さが感じられる。また、黒塗りの木部と漆喰による白壁により構成されたモノトーンの色合いと屋根のシルエットが、背後にある緑の山肌を背景として浮かび上がっていて美しい。程良い間隔に整えられた縦格子も小気味よい。良質な木材と高い大工技術に支えられて町中に作られた古い建築が、村の再生の起爆剤として再び活用されること、今後のリサイクル建築の典型の一つとして高く顕彰されるべきである。